

単なる「実学」を超える力



学長
すみだ くにしげ
角田 邦重

中央大学を旅立つ皆さんに心からお祝いを申し上げます。卒業おめでとう。大学生活で、皆さんが何を学び身につけたのだろうか、我々の側から言えば、皆さんに何を提供することが出来たのだろうか、と改めて考えています。

中央大学は昔から「実学の伝統」を掲げてきました。言い換えれば「実地応用に耐えられる学問」を目指してきたと言つてよいでしょう。いたずらに華やかさを追うのではなく「質実・剛健」（質素、誠実、健康に支えられた強い意志力）の校風と相まって、学員（卒業生）を含め「目

立たないが本当の実力を備え、堅実な生き方の中大生」というイメージが形づくられてきたと言つてよいでしょう。

このような伝統は、皆さんに対する教育にも、受け継がれていますし、私は、皆さんが中央大学での学生生活を通して、これからの職業生活で生き抜く力を身につけたに違いないことを期待し、また信じたいと思います。働くことを通して社会に参加することを回避したがる若者の増大が、フリーターやニートの名で大きな関心を集めています。もちろん人件費コストの削減に必死になつてい

る企業の政策から生じている側面を無視して語ることは出来ませんが、若者のリアリティーを欠いた現実感覚や自己意識の肥大化、あるいは怯えや甘えといった人間的成長の証である自立心の欠如によるところも少なくないはずです。しかし、中大生に関する限り、その心配は無用だと思つていません。

15年前のバブルの全盛期には、いろんな機会に、中大はもつと華やかさを演出しなければ若者を引きつけることは出来ませんよ、といった類いのアドヴァイスを受けたものです。しかし、世紀が変わった今、社会から要求されているのは本当の実力であつて、それは何よりも中大の「実学の伝統」に適つたものだと思います。

しかしもう一步突っ込んで考えると、この伝統の「実学」と、それを「実地応用に活かす」とことは一見して同じことのように見えながら、実際には大きな落差が存在している

と思います。それは、何よりも、実学の質が複雑化、高度化、グローバル化といった時代環境の中で大きく変わっているからです。単に、大学で学ぶのは専門的基礎教育にとどまるという意味ではなくて、何というか、新しい事態に向き合つて専門的知識を応用してぶつかる力であつたり、新しい発想力、単なる語学力を超えたコミュニケーションと文化の伝達能力であつたりといろいろですが、単なる知識ではない、知力を含めた人間的な総合力によつて、初めて両者の架橋が可能になると言いたいのです。この点で、中央大学が、法学部から理工学部、そしてもっとも実学から遠い文学部まで6つの学部を含む総合的の大学であることの意義は考えている以上に大きなものがあると思いますし、皆さんがこれから職業生活を送るようになれば、いやでも試されることになると思えます。皆さんの健闘を心から祈つていきます。

激動の中にあつて



総長
ほかま ひろし
外間 寛

めでたく卒業を迎えられた諸君に、心からお慶びを申し上げます。

諸君は、4年間の大学生活で身に付けた学問の力を携えて、ここから出発します。希望の職を得て、これから新しい社会生活が始まります。

いま日本の社会は、政府の「構造改革」の施策が推進される中で、大きな変革の過程にあります。政府の目標は、個人や個々の企業が、政府の干渉を排してそれぞれの創意工夫を自由に発揮し、そしてその成果が正當に報われるような社会を築くことにあります。公共の場でも民間の分野でも、終身雇用と年功序列を前提とする安定した秩序が崩れつつあります。自己責任が厳しく問われるよ

うになります。この傾向は、ますます強まることはあっても、停滞することはないでしょう。この激動の中にあつて、職業人として大きく成長することを願って、私は諸君に次の三つのことを要望したいと思います。ひとつは、自らの仕事の能力を高めるように絶えず努力することです。仕事は、さまざまな知識を要求します。大学で修得した専門知識は、ごく基本的なものにすぎません。学んだことあるいは学ばなかったこと、なんであれ積極的に挑戦して、自分の仕事に精通するように心掛けてほしいと思います。また仕事の上では、意見、認識、訴えなどを書面または口頭で表現することが求められます。同じ

ことを言うにも、ぶっきらぼうな言い方があり、またエレガントなスタイルもあります。仕事の責任が重くなるにつれて、表現が重要な働きをします。受け手に、なるほどと思わせる力のある表現をすることができるよう心掛けましょう。

もうひとつは、協調の精神をもつことです。いまは、どこでも仕事は組織化されています。多くの人びとの協同によつて、仕事が遂行されます。そこでは上司、同僚の間で信頼の関係を築くことが必要とされます。しかしまた、仕事仲間の間では自ずから競争が生じます。組織の中にあつて競争に打ち勝つために、個性を発揮せよ、自己主張をせよという言葉をよく聞きます。これは大切なことだと思いますが、しかしひとりよがりで行けというのとは違うでしょう。どんなに手強いライバルであっても、その人の長所を率直に認めて、そこから学ぶ心掛けをもつことが必要です。他人に学び、他人を尊重するという心が、自分の個性を磨き伸張させることにつながると思っています。

最後に、これはとても難しいこと

ですが、ものごとを正しく判断する能力を身につけるように努めましょう。責任のある立場に立つと、判断に迷うことがらについて判断しなければならぬ事態に直面します。この激動の中で、先例盲従というわけにはいかない場面が多々生ずることでしょう。そして処理しなければならぬことがらが、倫理・道義の問題に関わりをもつことが少なくありません。

日本人の間では、「正しい」という言葉を使うことに躊躇する傾向があります。もしかしてわれわれの間では、「正しき」に欠けるところがあつても、仲間うちに融和をもちたらし、そして融和を保つ決定が好まれるのかもしれませんが。しかし責任のある立場に立つての判断・決定は、当然周囲に大きな影響を与えます。自分の判断について責任を自覚するためにも、また他人に理解してもらうためにも、「正しい」とはどういうことか、日ごろ考えを深める訓練をつむことが大切なことだと思えます。

ご健闘を祈ります。

こだわりと洞察力



法学部長

かない たかし
金井 貴嗣

卒業生の皆さん、卒業おめでとう
ございます。

皆さん、卒業を機に、自分の人生
を振り返ってみるとともに、これか
らの自分の人生を考えてみませんか。
これまで、楽しいこともあれば、つ
らい思いをしたこともあったことと
思います。大学に入ってみると、中
学・高校とちがって、自由な時間が
たくさんあることに、とまどいなが
らも、自分を見つめる時間ができ、
これから何がしたいか、何ができ
るか、考えるようになって。しかし、
いざ、考えてみると、今、日本の社
会や日本を取り巻く国際社会がかわ
りつつあることに気がついて。自分が
いかに世の中のことについて知らな
かったかを自覚しながら。それでも、
いつまでも親の脛をかじるわけにい

かないから、生活の糧となる仕事に
つかなければと。さりとて、何でも
いいわけではなく、「生きがい」を
感じられる仕事を、と思い悩んだに
違いありません。

これから社会に出て、仕事をして
みると、「稼ぐ」ということがいか
にたいへんなことか、実感すること
でしょう。また、世の中、いい人も
いれば、いやなやつもいます。これ
から、いくつも壁にぶち当たります。
それらの壁を突き破ることができ
かどうかは、皆さんの、社会を洞察
する力と、何を大切に生きてゆきた
いかの「こだわり」の強さだと思
います。これらの洞察力と「こだわり」は、
皆さんが、大学を卒業してから、生
涯、行うであろう「学」「問」によつ
て養われ強くなってゆきます。

積ん読のすすめ



経済学部長

こぐち よしあき
小口 好昭

皆さん、卒業おめでとう。皆さ
んが中央大学そして経済学部で過
した学生生活が、実り多く有意義で
あったことを願っております。ご父
母の皆様にも、心からお祝い申し上
げます。長い間、本当にご苦勞様で
した。

経済学部は、今年で創立100周
年を迎えます。この記念すべき時に
経済学部を飛び立つ皆さんに、「積
ん読のすすめ」を贈る言葉に致しま
す。積ん読とは、辞書によれば「本
を読まずに積んでおくこと」です。

その心は、これはと思う本は今すぐ
には読まなくても、とにかく手元に
置いて当面は表紙を眺めるだけでも
いいから買って置きなさいというこ
とです。新しい本が一冊自分の部屋
に加わるたびに、部屋の空気が変わ
り、その人の知的空間が広がります。
たとえすぐには読まなくても、手近

にその本を積んで置くだけでも、知
的な刺激が伝わってくるのです。

生きる喜び、愛する喜び、失恋の
苦しさや大切さ、人生の悩みやそこ
からの脱出方法、人との付き合い方
など、人生を丸ごと学び考える必要
があるのは、実はこれからです。古
今東西の名著といわれる書物を読む
ことによって、同時代という身近で
はあるけれども限られた人間関係か
ら得られるものを遙かに超えた、人
類の知的財産を自分のものにでき
るのが読書です。

大学で学んだことが実務に直結す
ることは少ないかもしれませんが。し
かし皆さんは、課題発見力、冷静な
思考力や分析力、対話や討論する力、
プレゼン力などを間違いなく自分の
ものにしていきます。本のある生活を
心がけ、これまでに蓄えた力をさら
に豊かにし、良識ある市民として大
いに活躍してください。

目標を持ち、学びつづける努力を



商学部長
酒井正三郎

今日学窓を巣立られる卒業生のみならず、ご卒業おめでとうございます。今日の卒業生の多くは二〇〇一年度の入学であり、みなさんは二一世紀で最初の大学新入生になった人たちです。二度の大戦を経験した二〇世紀を経て、人類の平和と繁栄を期待されながら出発した新世紀でしたが、最初の数年間をみるかぎり、どちらかといえばその出足はあまり芳しいものではありませんでした。

「九・一一同時多発テロ」という前代未聞の事件が起こり、これをきっかけにアフガンやイラクで戦争が始まりました。世界の各地で頻発した爆弾テロや人質事件に追いつちをかけるがごとく、地震や津波といった大きな天災もありました。国内では、「失われた十年」から久しくなおバブルの後遺症は癒えず、リストラやフリーター、ニートといったカタカナ言葉も世相の中にすっ

かり定着しました。中国をはじめとする東アジア経済の台頭のなかで、「ジャパン・アズ・ナンバールワン」は、

今や「神話」の域に入りつつあります。みなさんが巣立っていくのは、こうした一見したところ先行きの不透明な、不確実性の社会であるようにも見えます。しかしよく言われるように困難な時こそチャンスの時です。変化の激しい時代を生きていく上で大切なこと、それは、つねに自信を見失うことなく自分の目標に向って学びつづける意志をもつということ、一人ひとりが持っている自分の夢や希望を大切に、これを育むための持続的な努力を怠らない、ということです。大学で得た教養、知識を生かし、その上に生涯剥落することのない、人生の豊かな開花させるべく頑張ってください。

二一世紀の社会に相応しい、新しい価値観の形成はみなさんの双肩にかかっています。みなさんの前途の明るく洋々たることを心より祈念して、卒業のお祝の言葉といたします。

荒野への旅立ちに向けて



理工学部長
風間重雄

この春に理工学部を卒業する皆さんがちょうど高等学校に入学した頃、ヨーロッパ諸国・日本・アメリカなどが参加している経済協力開発機構（OECD）より、「Science and technology in the public eye（一般市民の見た科学と技術）」と題する報告書が公刊された。そのなかに一四カ国で調査された「一般市民の科学的知識」と「一般市民の科学への関心度」でわが国はダントツで最下位となり、科学政策担当者や理科教

育関係者に大きな衝撃を与えた。その後、日本人からノーベル化学賞・物理学賞の受賞が相次いだことから多少は一般の人たちのあいだでも科学・科学技術に対する興味や関心も増したかとも考えられるが、わが国全体としての科学離れ・無関心には基本的に変化はないと考えてよい。たとえば、高度な先端技術からなる携帯電話がときには一円で売られる

状況が続き、景気回復の原動力ともなっていたデジタル家電製品も、最近では投げ売りされて原価割れとなり有力企業が撤退するという事態になっている。見方によっては、科学者・技術者という高度知識人が搾取されていることになる。

皆さんが理工学部で苦心惨憺して習得した理工学の専門知識も社会において素直に評価されるとは限らない。荒涼たる知的砂漠に出ていくようなものである。しかし、その時に羅針盤やGPS等の代わりにするのは、ほかでもない大学で学びとった基礎知識であり、課題設定・解決能力であり、合理的なものの考え方である。専門知識の賞味期限はそれほど長くはないが、基礎・基盤として身に付けたものは、必ず生涯の財産になる。卒業生の皆さんの今後の活躍を祈念してやまない。

力強く歩んで行かれることを



文学部長
まつお まさひと
松尾 正人

験は、皆さんの貴重な糧となっております。

御卒業おめでとうございます。大學生生活を終えて社会に船出される心境はいかがでしょうか。大いなる期待とともに一抹の不安を胸に持たれているのかもしれませんが。皆さんの大学時代は、イラク戦争に象徴される殺戮とテロ、情報が瞬時に世界を駆け巡るグローバル化、地球規模で深刻化した環境問題などが顕著になりました。これまでにない不透明でむずかしい時代に突入したといっただよいでしょう。

しかし、皆さんは、大學生生活でそのような不安を打ち消すだけの財産を獲得したはずで、皆さんは、マスコミを通じてさまざまな内外の問題を追いかけ、その解決策を考え、柔軟な頭脳で模索したでしょう。同時に、中央大学でそれぞれの専門分野を学び、学問の奥の深さも知ったはずで、そのような大學生時代の経

維新の三傑といわれた木戸孝允や大久保利通、西郷隆盛も、皆さんと同じ年頃に得た経験がその後の人生の核となりました。江戸に出て学んだ学問や全国の志士との交流が、自分の出身藩を越えて日本全体や世界を視野に入れ、新しい時代を創ることにつながったのです。社会や政治の方向を考え、自分の生きかたを模索し、歴史や文学、哲学にまで探求を深めたことは、必ず社会に出てから役立つはずで、

中央大学の校歌のなかに、「いざ起て友よ時は今、新しき世のあさぼらけ」という一節があります。「胸に血潮の高鳴りや、湧く歌声も晴れやかに、自由の天地ぞ展げゆく」に続きます。卒業生を送る時には、いつもこの一節で胸を衝かれます。皆さんが新しい出会いと可能性に富んだ人生を、胸を張って力強く歩んで行かれることを祈念しております。

賢者の心得



総合政策学部長
おおはし まさかず
大橋 正和

「賢者は歴史に学び、愚者は体験に従う」という有名な言葉がある。

体験は、「百聞は一見に如かず」ということわざのように重要な行為である。最近では、インターシッブなど様々な体験学習が行われている。大学から世の中に旅立つ卒業生諸君は、社会の中でこれから様々な体験をする。しかし、この言葉の意味は、賢者は、自分の体験や考えばかりで物事を理解するのではなくその原因や背景や世の中の変容などを考えて自分の経験や体験を普遍化することにより共通の原理や法則を見つけ出す事だと言うことです。ここでいう歴史は、日本史、世界史など様々な体系をさすのではなく世の中の出来事を普遍化した代表としての学問を指している。実際には、歴史を見る眼も年代順ではなく大学では課題別や地域別、問題別など様々な見方をすることを学ぶ。経済学や法学も同じで

学問体系の中で専門部分を深く学ぶことになる。学問の体系は、何々学と言われる学問も実際には様々な方法化している。このような研究の方法は、全体を部分に小分けにしてさらに部分を深く研究し元に戻すことによつて全体がわかるというような方法でありこれを還元主義という。近代科学の基本的な考え方の一つである。還元主義が成り立つのはおの要素が独立で関係が線形の場合であるがわかりやすい考え方のため世の中の仕組みの基本は還元主義的考え方では成り立っていない。二〇世紀になつてから還元主義では解決のしようのない問題が起つてきた。特に、二〇世紀の後半になつてからその傾向は顕著になつた。卒業生諸君はこのよふな変容が激しい世の中に出て活動をしなければならぬ。高校までの体系づけられた教育の基礎の上に大学での自律的に学び学習する能力を元にしてこの変容の社会を理解し自分の体験をふまえて新しい社会を築く気構えで活躍されることを切望する。